

なつかしい文化から 新しい出会いを・・・

日本の古き良き伝承遊びである、「お手玉遊び」。最近「お手玉遊び」は、健康、福祉、教育、交流など幅広い分野でその効果が注目されています。

市ではこれらの効果に着目して、「お手玉遊び」の普及事業を進めており、昨年度は「市民お手玉遊び大会」を初めて開催しました。今年度も、昨年度に引き続き6月に「第2回市民お手玉遊び美濃加茂大会」、そして9月には「第14回全国お手玉遊び岐阜・美濃加茂大会」を開催します。

今回は、お手玉に取り組む人たちを取り上げながら、お手玉の魅力についてお伝えします。今からでも遅くありません。あなたも大会に出場してみませんか。



昨年行われた「第1回市民お手玉遊び大会」の様子

「お手玉遊び」は大昔から行われていた お手玉の歴史

「お手玉遊び」の歴史は古く、日本には、奈良時代に中国から伝えられました。

お 手玉の遊び方は、大きく二つに分けることができます。一つは「振り技（ゆりぎ）」といって、何個かのお手玉を手でゆり上げて遊ぶ方法です。もう一つは「拾い技（せきぎ）」といわれるもので、5個、7個など奇数のお手玉を床にまき、そのうちの1個（親玉）をゆり上げながら、残りのお手玉を寄せ集めたり、手でつくったトンネルをくぐらせたりして遊びます。

世界最古の「お手玉遊び」は、この「拾い技」といわれています。元京都

大学教授の藤本浩之輔氏によると、それは、羊の距骨（かかとの骨）のお手玉だったといえます。羊の距骨を使ったお手玉は、紀元前1,000年ごろ、黒海周辺のトラキアで遊牧民たちの道具として使われていたともいわれています。

羊の距骨を使った「お手玉遊び」は、やがて、シルクロードを通じて、インドや中国にも伝えられています。しかし、羊の距骨はどこでも手に入るわけではありません。そこで、羊の骨のか

わりに、身近にある小石を使うようになりしました。これが、「石なご」といわれる遊びの始まりです。「石なご」も「拾い技」で、5個を1組とし、1個の石（親石）をゆり上げているうちに、残りの石を拾っていきます。

「お手玉遊び」が、日本に伝えられたのは、奈良時代です。そのころ、日本は中国との交流が盛んで、中国からは、さまざまな技術、文化が入ってきました。その中の一つに、この「石なご」の「お手玉遊び」がありました。「石なご」のお手玉は、平安時代には、一般の人々にも徐々に伝えられ、日本各地に広がっていきます。

やがて、江戸時代後半になると、布のお手玉が登場し、遊び方も「拾い技」から、体をリズムカルに動かす、「振り

技」が多くなってきました。

江戸時代の終わりから明治時代にかけて、座布団型のお手玉が現れます。着物などの端切れを4枚はぎ合わせてつくったこのお手玉は、彩りもきれいで、ゆり上げて、寄せても、据わりが安定しているところから、日本全国に広まっていました。

昭和30年代後半から昭和40年代にかけて、各家庭にテレビが普及し、子どもたちの遊びの環境も変わってきました。それとともに、長い間遊び継がれてきたお手玉は、次第に忘れられていきました。

しかし、ここ数年、お手玉遊びの素晴らしさが見直され始めてきています。

※お手玉の歴史については、「日本のお手玉の会」監修の「お手玉 OTE DAMA」（柳文溪堂）を参考にさせていただきました。